

統計

出入情况

大正十年支那重要輸出入品商況中より鐵網に關するものを摘録すれば左の如し。

輸入

金屬及鑛產 大正十年中金屬市場の大勢は常に下向なりき年初外商及支郡商共に其手許に堆貨甚だ多く之を救済し得べく思惟せられたるは内地に於ける在荷甚だ僅少なるより早晚需要を喚起し以て形勢を挽回するならんとの點に存したり、然れども是等手持品は最高價當時の註文品なれば其所持者は大なる損失を免れざるべし、斯くて新規註文は極度に差控へられたれども持越せる堆貨の約八割は大正十年末迄に決濟せられたるものゝ如し、而して下半年期の交易は良況なりしと雖尙平時に及ばず、但し年末在荷は前年に比し甚だ少し故に次年は有望なるものゝ如し。

金屬及鑛產の輸入總額は前年の六千五百五十六萬五千五百五十七兩に對し六千七萬八千三十九兩とす、主要品目別に大正二年同九年及十年の數量を示せば左の如し。(單位擔)

銅	大正二年	大正九年	大正十年
鐵軟鋼及舊鐵	二八、一四四	四六、一九五	五〇、四六三
亞鉛引鐵板及鍊	三、五二〇、四九	五、五六〇、〇九	四、一六一、九三
鉛	二九、一五五	三三九、一九二	三三〇、二七九
	一八、三三五	七三、一九一	一五七、三二二

水	銀	六五四	四七四	七四四
鋼	鐵	一四九七〇	一六二六七六	九七三〇八
錫	(塊及製品)	五二七八一	五二六〇五	七五、六三五
鉍	力	三六三、三六六	五八九三八八	四〇三、二四七
鐵	鑛	一、五九六	三三二、三六四	九九、三二

機械類 支那の工業發達の迅速なるは機械類輸入の數字に見るも甚だ顯著なり、大正十年各種機械類の輸入額は概ね前年を超過し殊に織物機械の増進は最著しく前年の六百九十萬兩より二千六百七十萬兩に上れり、農業機械亦倍加して前年の百萬兩より二百二十萬兩となれり、推進機は前年の二百三十五萬兩より五百十萬兩となれり、織物機械輸入額二千六百七十萬兩の内千百十六萬三百十三兩は英國より、七百四十七萬千五百二十兩は米國より輸入せられ、加奈陀より四百二十九萬六千兩、日本より三百六十二萬二千兩、獨逸より十三萬千兩の輸入あり、各國競争の激烈なる以て見るべく、就中獨逸は貨幣相場の低落より輸出に最有利なりき。

電氣材料 本品の輸入額は千三百二十萬兩に上り、前年の六百三十萬兩、前々年の五百萬兩に比し著しき増進なり。小發電機の販路は大に減退せるが如きも大發動機及大發電機は内地の各所に設定せられたるより千二千乃至五千キロワット單位の機器賣行甚だ多し、二年前には電力二百乃至四百キロワットのものに過ぎざるのみならず、従前電氣の使用は専ら夜間に限られたりしが、各重要地點に於て晝間にも亦之が使用を見るに至れるは電氣使用の一大進歩にして南京蘇州杭州等に於て其然るを見る、電氣部分品裝置品及電燈に關しては日本品は各種電線磁質絶電器に於て市場に優勢を保ち和蘭品

は電燈米國品は上等裝置品及硝子器に於て名聲あり年末獨逸製硝子裝置品市場に現はれ米國品よりも廉價なりき本品の貿易は前途益々有望なりとす。

鐵鋼類輸入額前年比較表

金屬及鑛石類 品目	數 量	價 額	數 量	價 額
	大正九年	大正十年	大正九年	大正十年
眞 鍮(塊、板等) 擔	四、四六六	一、三三四一	三、六六二	一、三三八五
銅(條、竿、板、釘、線) 同	九、四九七	一、九〇一、六九	二、七〇九	一、〇三三、〇三六
鐵(錠及塊) 同	四、六六八	九、三三二、四六	四、七五三	二、〇六四、九三五
鐵(アングル、ス及ティ) 同	一、五八四、三	一、〇〇一、六七	一、四七六	八、九三、三七
同 (條) 同	一、三三、七三三	七、九三、四四五	六、八五〇、四三	四、三三四、三五四
同 (ゴプル及ワイヤ) 同	三、六七一、九二	一、四〇六、八五	一、七四〇、〇八	七、三三、九二九
同 (シヨルト) 同	一、九六九、〇	七、九三、四九	三、七五二	三、七三、九七四
同 (工字鐵) 同	二、四四三、九	一、五九、三八五	四、八三、八二	四、〇三、四三四
同 (釘) 同	三、四六、九〇	三、〇六、九四	二、七、七八	二、〇七、八〇九
同 (管及筒) 同	一、八二〇、一六	四、五〇、九八三	三、三三三	一一、三〇九
同 (板斷片) 同	二、四六、九〇	二、七〇、四七六	二、四二、三六	四、〇〇一、一〇三
同 (軌條) 同	五、〇〇、五三六	一、七〇、四六〇	三、〇九、九二五	一、〇九七、九八
同 (螺旋釘) 同	三、九〇一、七九	二、〇六、七三六	一、〇七、五五	七、二九、五四二
同 (板) 同	五、〇三三	一、四九、八〇九	六、九二八	二、三〇、二五五
同 (線) 同	六、七二六、〇二	四、六三、八五四	三、五二、七三	二、七、八〇二
同 (其他) 同	六、八二、七三	四、九一、一七八	三、一、三五六	二、九九、三九八
舊 鐵 同	三、三三、〇九〇	一、七、八、四三三	三、〇三、九七四	二、二六五、二六二
電 鍍 板 同	九、五五、七二六	二、五五、三、七〇九	三、七、六七九	一、〇九六、二九
電 鍍 線 同	二、六、一、〇七	二、五、四、四二二	一、四四、六六七	一、七、〇六、七〇〇
其他鐵及鋼製品 同	四、一四、九五	五、七〇、七四七	七、五九二	七、三、七、九四七
鉛 (塊及條) 同	六、一、三五八	四、三八、六六三	六、七、三五	九、七〇、五三〇
鋼 鐵(竿、條、板等) 同	一、三、七、二五	一、一〇、四、九七	一、五、四、七	九、八、八、四七九
統 計			八、一、七、三	八、九、七、五九

(價額單位海關兩)

同 (線索等) 同	三、〇、九六	五、〇、三〇	一、六、〇、三六	四、六、八、四五
錫 同	五、二、二八	二、六、五、五、六	七、五、四、八三	三、六、五、八、八
鐵 同	五、九、三、八八	五、四、一〇、五、五	四、〇、二、四、七	五、五、四、九、五
鉛 同	一、四、五、七〇	一、三、七、四、九	一、四、二、二	一、四、三、八、三
計 (其他を含む)	六、二、五、五、五	六、二、五、五、五	六、二、五、五、五	六、二、五、五、五

輸 出

金屬及鑛產 金屬及鑛產も亦支那の輸出品中重要な地位を占む、然れども國內に於ける鑛產資源の巨大なるに顧みれば其輸出數量は尙甚だ小なりと謂はざるを得ず、大正十年鐵鑛の輸出額は前年の千百二十九萬二千四百七擔より減少して八百五十一萬七千六百六十二擔となり、安質母尼鑛は一萬九千四百五十九擔にして前年に比し約三千擔を減じたり、然れども鉛鑛は著しく増進して前年の三萬九千五百三十四擔より十一萬二千百十擔となり、亞鉛鑛亦前年の十五萬七百二十九擔より十九萬七千二百二十二擔に増進せり、其他精製安質母尼水銀亞鉛は増加せるも粗製安質母尼鐵條鐵板錫塊は減退し、殊に錫塊は前年の十八萬九千九百四十擔より減少して十萬三千三十五擔となれり、他類鑛石の章に屬する四十九萬七千二百八十擔の内には蒼鉛千九百九十三擔、銅二十二擔、滿俺四十二萬三千七百三十二擔、モリブデム鑛三萬六千六百八十四擔、オルフラム鑛三萬九千五百五十四擔、石棉十三擔を含むものとす。

鐵鋼類輸入額前年比較表

(價額單位兩)

金屬及鐵石類	一、六〇、八三三	七、九、七、三三	二、〇、九、四、四	一、〇、六、一、七、六
安質母尼(精) 擔	七、五、四、一	三、六、八、二四	四、一、九、〇三	一、七、一、九、九
同 (粗) 同				

銅	擔	三、六二	九、九六	一、五八三	二四〇、九六
鐵	(銑) 同	三、六五、六五	七、八四、四八	二、六四八、一〇三	五、三六、七五
同	(鑛石) 同	二、三九、四七	二、六一、七六〇	八、五二七、一六三	一、五〇、六八七
鉛	鑛 同	三九、三四	一、五七、六六	一〇、一七〇	三、八、五九
錫	塊 同	一、八九、四〇	二、〇八、一六七	一〇、〇三	六、〇〇、四五六

◎最近米國銑鐵製産概況

(在シカゴ領事桑島主計)

鐵道職工及石炭坑夫罷業の結果七月中衝風爐二十六基は休止せるに拘らず當月中の銑鐵製産高は前月に比し約四萬噸を増加したり、之専ら當月が前月に比し一日多かりしに依る、即ち當月中銑鐵製出高は二百四十萬四千六百五十五噸にして前月の二百三十六萬二千四百五十五噸に比し三萬八千十噸の増加なりき。

マーチアアント銑鐵の製造高は四十五萬四千四百三十噸にして前月の四十二萬三千六百七十二噸に比し三萬七百五十八噸を増加せり、即ち一日平均製造高は一萬四千六百五十九噸にして前月の一萬四千二百二十二噸に比し五百三十七噸の増加なりき。

ノンマーチアアント銑鐵製出高は百九十四萬六千三十五噸にして前月の百九十三萬八千七百八十三噸に比し七千二百五十二噸の増加なるが之を一日平均の製造高に付て見るに前月の六萬四千六百二十六噸に比し六萬二千七百七十五噸にして千八百五十一噸の減少なり。

七月三十一日現作業中の衝風爐數は百七十基にして前月末の百九十一基及前々月末の百七十五基に比し減少を示し最近

十六箇月間に於ける最少數たり。

最近二箇月間の銑鐵製産比較表

州	衝風爐	七月末、六月末	ヤント	チアアント	七月	六月	計
ペンシルバニア	六三	六九	五八、九三九	七三、五四二	七九、三四〇	七九、八三三	
オハイオ	三〇	四二	九二、七〇三	四六、七二八	五〇、〇〇八	五五、〇〇八	
アラバマ	三	三〇	二二、一八七	七三、一一三	一九四、三〇〇	一八八、〇〇八	
バージニア	二	一三	六〇、六四四	八五、二二五	一四八、八六九	一四八、二七八	
ニュージャージー	一	一	一〇、四七五	一〇、四七五	一〇、四七五	一〇、四七五	
イリノイス	二	二六	四七、二六五	三三、二八七	二六、九七三	二五、四一九五	
コロラド	三	三	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
インディアナ	一〇	二二	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
メリランド	三	四	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
ウイスコンシン	二	二	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
ケンタッキー	二	二	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
西バージニア	二	二	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
テネッシー	三	二	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
ワシントン	三	二	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
ジョージア	一	一	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
テキサス	一	一	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
ミネソタ	二	二	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
ミシガン	二	二	一六、八六三	二七、二八七	二八、九一四九	二八、八五二	
ミッヅリー	〇	一	一〇、一八三	一九、七六五	二七、九四八	二七、九四八	
各州(スピリゲルフェロ)	一	一	一〇、一八三	一九、七六五	二七、九四八	二七、九四八	
州(マンガンニズム)	一	一	一〇、一八三	一九、七六五	二七、九四八	二七、九四八	
計	一七〇	一九二	四、五四四、四三〇	一、九四六、〇三五	二、四〇〇、四四五	二、三六二、四四五	

◎米國鋼鐵薄板製造概況

本邦の製鐵業の材料は専ら英米支三國の供給に係り就中鐵

鑛及銑鐵は支那に又輾鐵及鋼軌條は、英米兩國に其供給を仰げり、而して前年度本邦輸入輾鋼鐵の約六割軌條の七割は何れも米國の輸入に係れり、從來米國輸出の輾鋼鐵は主として造船材料たる形鐵板多きを占めたるも戰後海運業の不況に伴ひ造船界は未曾有の大打撃を蒙りたる結果此種製鐵の需要衰へ鐵屋根下水管看板コップ及料理用具及珐瑯鐵器の材料として日本に於ける鋼類薄板の需要増加し、本年一月以降四月に到る四箇月間の同輸入總額十萬七千噸中九萬六千二百二十三噸即ち約九割は米國製品なりと云ふに徴し當國薄板製造業の如何は本邦鐵工業に影響する所大なりと云ふべし。

薄板の用途 最近十數年間に於て薄板使用範圍は著しく擴張せられ從來木材或は石材を以て製造せられたる各種製品は漸次薄板を以て代用せらるゝに至れるが、之木材石材の供給豊富ならざると薄板製品の耐久力優れるに依ると云ふ現に數年前迄事務所用什器は大部分木製なりしに最近に至りては、専ら薄板を以て製造せられ、且つ其技工も大に進み木目の如き一見實物と異らざる程度に達せり、而して薄板は其製造方法に依り素薄板青色薄板亞鉛鍍薄板の三種類に分つ就中其用途最も廣きは素薄板にして亞鉛鍍薄板之に次ぎ青色薄板は前二者に比し、其用途未だ少なり。

以下各種薄板の用途を列記す

青色薄板 包裝機、樽、パン焼、卸樋、草刈器、窯、穿孔機、捲帶用窯、竈、暖爐、暖爐用管、同アングル、同肘管、同漸縮器、タンク、洗淨器、補剛材器
素薄板 宛名刻名器、農具、アルカリ容器（大鼓形）、灰入函、各種自動車材料品、金物容器、パン焼鍋、廢臺、自轉車、ゴミヨケ、同管絲送風機、鐵蓋、箱、ボタン、カン及鼓形容器、電車座席、同窓、敷物、掃除器、腰掛、手箱、時計、握手、石炭入、卸石炭樋、石炭、ウヨールベル、コンクリート、卸樋、コ

ンクリート混合器、クリーム分類器、下水管、下水機、鶏卵容器、電氣暖爐、昇降器圍壁、珐瑯器擴管、瓦斯槽、ガス暖爐、ガス溜、漏斗、手紙入函、臺所用具入、各種機關構成品、灰汁容器、金屬天井、金屬車軸、音樂用平圓盤、油爐、油タンク、油層入器、額ブチ、粉入小桶、押ボタン、放熱器、ロースト用鍋、鍋、シヨールベル、看板、眼鏡函、貯藏用タンク、暖爐用管、茶盆、道具箱、玩具カバン、洋傘中軸

亞鉛鍍薄板 拱、灰入函、日覆、パン焼カマド、樽、籃、張板、バケツ、建築用圓柱、電車の屋根、天井、煙突、水槽、衣服乾燥器、蛇腹、コルセット中軸、頂飾框架、戸、軒窓、軒窓用屋根、脇腰、電氣看板、昇降機材料函樋、框、瓦斯爐、ガソリン入罐、樋、熱器爐、湯タンク、氷箱アイスクリーム罐、ランブ柱、洗濯屋用タツプ、救命艇、油罐、冷却器材料保藏器、看板、穀倉、天窓雪カキ、管、砂糖蒸發器、糖蜜蒸發器、タンク、桶、洗濯用器、風車

製造額 前述の如く各種薄板の用途は多種多様に互り來れるを以て、其結果其製造高も亦大に増加したり、即ち一九一三年度は漸く百九十二萬一千噸なりしに同一五年には二百一十六萬二千二百九十八噸となり、一九二〇年には三百十三萬三千二百十七噸に達したり、而して現在當國各地薄板工場の製造能力は年額四百十六萬九千噸なるを以て、今後益々用途の擴張に伴ひ製造増加の能力を有せり。

以下最近九年間の製造高を表示す。（單位噸）

年 次	製 造 高
一九一三年	一、九二一、〇〇一
一九一四年	一、六六八、六四四
一九一五年	二、一〇六、二九八
一九一六年	二、四九二、七九四
一九一七年	二、五九六、六〇六
一九一八年	二、一七六、五三七
一九一九年	二、三一六、〇五七
一九二〇年	三、一三三、二一七

※一九二二年

一、七二三、二八八

備考 ※前年度製造は一九一三年以來の最少額なるが之同年製鐵業の不振異常なりしに依る

製造地 薄板製造はオハイオ、ペンシルバニア、インディアナ、ケンタッキー、メリランド、ウエストバーヂニア、ニューヨーク、ウキスコンシン、ミッヅリー、イリノイス及デラウェアの十一州に互れるも米國全製造額の八割五分以上はオハイオ、ペンシルバニア、インディアナの三州より製出せらる、就中オハイオ州は第一位にありて約五割六分を産しペンシルバニア州は二割五厘インディアナ州は八分八厘を産し夫より二位三位を占む換言すればオハイオ州は爾餘の十州の製造總額に比し二割七分の増加なり、更に第二位のペンシルバニア州に比し約十七割三分又インディアナ州に比し五十三割七分強を製造せり。

各州製造高割合百分比

州 名	製造會社	工場	製造能力	製造割合
オハイオ	三一	三五三	二、三三五、七〇〇	・五六〇
ペンシルバニア	一三	一五三	八五四、七〇〇	・二〇五
インディアナ	三	四三	三六六、五〇〇	・〇八八
ケンタッキー	二	二五	一五九、〇〇〇	・〇三八
メリランド	二	二二	一五六、〇〇〇	・〇三七
ウエストバージニア	四	二九	一三〇、〇〇〇	・〇三一
紐 育	一	一四	七〇、〇〇〇	・〇一七
ウキスコンシン	一	八	四〇、〇〇〇	・〇一〇
ミッヅリー	一	六	二四、〇〇〇	・〇〇六
イリノイス	一	三	二二、〇〇〇	・〇〇五
デラウェア	一	四	一二、〇〇〇	・〇〇三

製造工場 製造工場數は總計六百六十にして内七工場は目

下建設中に屬す之實に一九一四年に比し約四割の増加を示せり、而して單獨會社の工場數は五百五(七割六分五厘)にして今回會社經營の工場數は百五十五(二割三分五厘)にしてオハイオ州内の工場數は三百五十三にして約五割三分五厘、又ペンシルバニア州は二十三工場即ち六分五厘を占む。

工場は前記十一州内四十四都市に散在しオハイオ州にては十八都市に互り就中ナイルスは五十四工場存し米國中薄板工場數に於て第一位を占む又同州カントン市は四十九工場を有し、第二位にあり、ペンシルバニアのバアダーグリフト市は三十九工場を有して第三を占む。

以下十一州十六區内の工場數並に製造年額を表記す。

區	工場數	割合	製造能力	割合
(一)マホニング・バレー	二七	二七七	八二七、四〇〇	一九六
ニユートン(オハイオ)	二六			
ナイルス(同)	二五			
ワレン(同)	二三			
ヤングスタウン(同)	二四			
(二)アンデニー及キスキミネタス河九八	二四	二四九	五五九、〇〇〇	一三六
アポロー(ペンシルバニア)	二四			
プランケンツヂ(同)	二三			
ハイドパーク(同)	二六			
リーチバーグ(同)	二二			
バアダーグリフト(同)	二二			
(三)サウザン區	七三	二二	四三三、〇〇〇	二一八
アシユランド(ケンタッキー)	五			
ミッドルタウン(オハイオ)	二四			
ニユートン(ケンタッキー)	二〇			
パークスバーク(ウエストバージニア)	六			
ボーツマウス(オハイオ)	八			

統計

(四)シカゴ區	四六	九〇	三六、〇〇〇	九・一
ゲリー(イリノイス)	二〇	—	—	—
インデアナハーバー(ケンタッキー)	一八	—	—	—
ミルウォーキー(ウイスクンシン)	八	—	—	—
(五)カントニーマシロン區	六〇	九・一	三六、〇〇〇	八・三
カントニー(オハイオ)	四九	—	—	—
マシロン(同)	二	—	—	—
(六)スチューベンビル區	四四	六・七	二九、〇〇〇	七・二
ビーチボットム(ウエストバージニア)	八	—	—	—
フォランズビル(同)	七	—	—	—
スキューベンビル(オハイオ)	二〇	—	—	—
ツロント(同)	二〇	—	—	—
ウエルスビル(同)	一〇	—	—	—
(七)イースタン區	三六	五・五	二四、〇〇〇	五・八
バルチモア	二	—	—	—
コンシヨホツキン(ペンシルバニア)	一〇	—	—	—
スパローポイント(同)	一〇	—	—	—
ウイルミントン(デラウェア)	四	—	—	—
(八)クリブランド區	二六	四・〇	二四、〇〇〇	五・六
アシユタブラ(オハイオ)	八	—	—	—
クリブランド	一八	—	—	—
(九)ドーバー、ニューフキラデルヒア區	二三	四・七	二六、〇〇〇	四・三
ドーバー(オハイオ)	九	—	—	—
ニューヒラデルヒア	二	—	—	—
(一〇)ピッツバーグ區	元	四・四	一四、〇〇〇	—
マツキースポート(ペンシルバニア)	二	—	—	—
スコットデール(同)	二七	—	—	—
(一一)ケンブリッヂ、ゼンズビル區	三三	三・五	一二、〇〇〇	二・七
ケンブリッヂ(オハイオ)	二	—	—	—
ゼンズビル(同)	三	—	—	—
(一二)マンسفキルド區	一七	二・六	八、〇〇〇	三・一

(一三)バアツファロ區	二四	二・一	七〇、〇〇〇	一・七
(一四)フヒーリング區	一五	二・三	六三、〇〇〇	一・五
ブリッヂボート(オハイオ)	—	—	—	—
マーチンフエリー(同)	六	—	—	—
ウヒーリング(ウエストバージニア)	八	—	—	—
(一五)セントルイス區	九	一・三	四六、〇〇〇	一・二
グラナイトシチー(インデアナ)	三	—	—	—
セントルイス	六	—	—	—
(一六)フエナンゴバーレー區	—	—	—	—
フアレール(ペンシルバニア)	八	一・三	四三、〇〇〇	一・二
(一七)キャノンスバーグ區	八	一・三	四〇、〇〇〇	一・〇
(一八)インデアナポリス區	五	〇・八	三〇、〇〇〇	〇・七
計	六〇	一〇・〇	四一六、九〇〇	一〇・〇

製造會社 薄板製造會社は普通會社組織と會社組合組織によるものとを合して前記の如く六十に達せるが、其内最も製造能力の大なるはアメリカン・シート・エンド・チンプレート會社にしてオハイオ及ペンシルバニア兩州内に十三製造所を有し工場數百五十六にして製造能力九十萬八千八百噸(二割七分七厘強)に及ぶ之に次ではフイーリング・スチール、コーポレーションにしてオハイオ及ウエストバージニア兩州内五製造會社を有し、製造工場六十五、製造能力四十二萬九百噸(一割九厘強)に達す。

◎戦前戦後に於ける白國鐵鋼

業概況

(在アンヴェルス帝國領事岸倉松)

熔鑛爐數及一日生産高 白國に於ける熔鑛爐は戦前一九一三年に於ては五十五基にして其内五十二基は作業に従事し休

業のものは二、三に過ぎざりしが現今に於ては總爐數五十
四基を算するも現に作業中のものは僅に二十四基に過ぎず、
其他は戦時中の破損等に依り修繕中のもの十六基一昨年來の
不況に依り休業中のもの十四基に及び是等の二十六基はヘイ
ナウ及ブラバンド地方に二十基はリエジュ地方に八基はルク
サンブルグ地方に在りとす、而して現に作業中に係る熔鑛爐
二十四基の一日總生産高は鋼三千八百三十五噸、鐵四百十噸
合計四千二百四十五噸にして、戦前一九一三年の七千三百七
十九噸に比し漸く其半に達するに過ぎず尙其詳細を示せば左
表の如し。

熔鑛爐配置及一日製産高表

	熔鑛爐數				一日生産高			
	作業中	休業中	修繕中	計	爐數 (鐵)	噸數	爐數 (鋼)	噸數
ヘイナウ及ブラバンド地方	二	二	一	四	一	一	二	二〇〇
サムブル・エ・モゼル	一	一	一	三	一	一	一	一六五
モンシエレ	一	一	一	三	一	一	一	一六五
タイ・ル・シャトウ	一	一	一	三	一	一	一	一六五
シユド・ド・シャテリノー	一	一	一	三	一	一	一	一六五
ヘイナウ	一	一	一	三	一	一	一	一六五
ボンシール	一	一	一	三	一	一	一	一六五
モンソー	一	一	一	三	一	一	一	一六五
ラ・プロギデンス	一	一	一	三	一	一	一	一六五
ユジヌ・ド・シャテリノー	一	一	一	三	一	一	一	一六五
クラベツク	一	一	一	三	一	一	一	一六五
ポエール	一	一	一	三	一	一	一	一六五
小計	九	二	六	一七	九	一六〇	九	一六〇
リエジュ地方	二	二	二	六	二	二	二	二〇〇
コツケリール	二	二	二	六	二	二	二	二〇〇
オンダレ	二	二	二	六	二	二	二	二〇〇

七七〇

アングラ
エスベラ
小計
ルクサンブルグ地方
アテユース
ハランチ
ミユツソ
小計
小計
生鐵及生鋼產出高
過去二十餘年間に於ける生鐵及生鋼の
產出を通觀するに一九一〇年以降大體に於て逐年累進して戦
前一九一二、三年の交最高調に達し生鐵二百四十八萬噸、生
鋼二百四十六萬餘噸計約五百萬噸を超えたりしが大戰の勃發
と共に逐日凋落して休戦當年たる一九一八年に於ては實に一
萬千噸てふ悲惨なる計數を見たるも戦後漸次其形勢を挽回し
て一九二〇年に至りては生鐵百十一萬餘噸、生鋼百二十五萬
餘噸の產出を見たるも未だ以て戦前盛況の半に達せざること
左表の如し。(單位噸)

生鐵及生鋼產出高表

年次	生鐵	生鋼	年次	生鐵	生鋼
一九〇一年	一、八四一、八〇〇	五九八、四〇〇	一九一〇年	一、八五二、九〇〇	一、九四四、八〇〇
一九〇二年	一、八六九、〇〇〇	七六六、九〇〇	一九一一年	一、八四六、二〇〇	二、一九二、六〇〇
一九〇三年	一、三六〇、〇〇〇	九八八、一六〇	一九一二	一、三〇一、三九〇	二、五五、一四〇
一九〇四年	一、二七六、〇〇〇	一、〇七〇、七〇〇	一九一三	一、四八四、六六〇	三、四六六、六〇〇
一九〇五年	一、二二二、三〇〇	一、一七〇、二〇〇	一九一四	一、四五四、九一〇	一、三六六、三〇〇
一九〇六年	一、七五五、七五〇	一、四〇〇、七六〇	一九一五	一、六八一、五五〇	一、九七、八二〇
一九〇七年	一、四六六、九八〇	一、五二二、六八〇	一九一六	二、二七、八二五	九、九、三七
一九〇八年	一、一七〇、〇〇〇	一、三九八、一三〇	一九一七	七、九、九〇	九、五、三〇

價格 鐵鋼の價格は戰爭の爲著しく騰貴し戰後の價格は戰前に比し殆ど比較し得ざる程度に昂騰せり今試みに大戰前後十年間の生鐵一噸の平均價格を示せば左の如し。

生鐵價格表

一九一五	一九一四	一九一二	一九一二	一九一一	年次
八四・三八	六七・一四	七三・七九	六九・八九	六五・三〇	法
一九二〇	一九一九	一九一八	一九一七	一九一六	年次
四八九・四〇	二八一・六九	一一九・五二	八八・八三	法	

製鐵及製鋼の製產高比較　白國に於ける製鐵及製鋼の製產は一九〇〇年以前に於ては鐵常に優勢なりしが同年以降其形勢逆轉して一八五一年に於て皆無なりし製鋼は一九〇三、四年の交より鐵の二倍乃至三倍の製產を見るに至りたること左表の如し。（單位噸）

	製鐵	製鋼
一八五一年—一八六〇年	一四三、一〇〇	一
一八六一一年—一八七〇年	三五八、八〇〇	一、二〇〇
同		
一八七一一年—一八八〇年	四八六、七〇〇	四六、三〇〇
同		
一八八一一年—一八九〇年	五〇五、四〇〇	一六三、七〇〇
同		
一八九一年—一九〇〇年	四六四、八〇〇	四一六、六〇〇
同		
一九〇一年—一九一〇年	三五五、五〇〇	一、〇四一、四〇〇
同		

而して爾來製鐵高は漸次減退するに反し製鋼は累進して一九一一年乃至一九一三年の平均製鋼高は鐵の三十萬九千八百噸に比し百七十八萬八千七百噸の巨額に上り實に鐵の約六倍

に達し其後大戰の勃發と共に痛く障害を受けたるも兩者の比
例は大體に於て右と同一歩調を以て進むものと看做し得べし
即ち之を詳示せば左の如し。(單位噸)

製鐵及鐵鋼高比較表

年次	製鐵	製鋼	年次	製鐵	製鋼
一九〇一	三六〇,六〇〇	四八八,六四〇	一九一二	三三四,八〇〇	一,九〇三,二七〇
一九〇二	三八一,六〇〇	七五五,三三〇	一九一三	三〇四,四〇〇	一,八五七,八六〇
一九〇三	三九二,四〇〇	九二四,二五〇	一九一四	一五二,一〇〇	一,一九七,六七〇
一九〇四	三九五,二〇〇	一,〇三三,五六〇	一九一五	二八,一〇〇	一,五六三,八〇〇
一九〇五	三七七,六〇〇	一,〇九一,四〇〇	一九一六	一〇一,〇〇〇	一,三六三,五〇〇
一九〇六	三三八,三〇〇	一,一六四,七四五	一九一七	五二,六〇〇	一,三三三,五〇〇
一九〇七	三五六,五〇〇	一,二六六,六六〇	一九一八	五二,一〇〇	一,五九八,〇〇〇
一九〇八	三六六,七〇〇	九八九,四〇〇	一九一九	六八,八〇〇	一,四三三,二六〇
一九〇九	三〇四,九〇〇	一,二六四,六五〇	一九二〇	一六二,九〇〇	一,一三二,七三〇
一九一〇	二九九,五〇〇	一,五三四,五五〇	一九二一	四九八,八〇〇	一,八三三,〇〇〇
一九一一	二九〇,三〇〇	一,六三四,九六〇			

製鋼業 當國に於ける製鋼業は白國產生鋼及佛、獨、ルク
 サンプルグより輸入生鋼を精煉するものにして鍛鋼場及變壓
 場の二種に分ち一九〇一年以降の製產高に示せば左の如し。

年次	鍛鋼場	變壓場	計
一九〇一	三七二、四九〇	二一七、一五〇	四八九、六四〇
一九〇二	五五八、五一〇	一六六、八一〇	七二五、三二〇
一九〇三	六八三、〇七〇	二三一、一八〇	九一四、二五〇
一九〇四	六三〇、二九〇	三九三、二七〇	一、〇二三、五六〇
一九〇五	七六八、四七〇	三二二、九三〇	一、〇九一、四〇〇
一九〇六	八三一、五七〇	三八三、一七五	一、一六四、七四五
一九〇七	九一三、三一〇	三〇三、三八〇	一、二一六、六九〇
一九〇八	七五四、八七〇	三三四、五三〇	九八九、四〇〇

一九〇九	九四七、六三〇	三一六、九九〇	一、二六四、六五〇
一九一〇	一、一五五、七四〇	三七八、八一〇	一、五三四、五五〇
一九一一	一、二三六、六二〇	四一八、三四〇	一、六三四、九六〇
一九一二	一、三九九、二七〇	五〇四、〇〇〇	一、九〇三、二七〇
一九一三	一、四〇九、四六〇	四四八、四〇〇	一、八五七、八六〇
一九一四	八六六、三五〇	二二一、三二〇	一、〇九七、六七〇
一九一五	九四、二七〇	四二、〇一〇	一三六、二八〇
一九一六	六一、九〇〇	六〇、一三五	一二二、六三五
一九一七	九、八七〇	一三、六六〇	二三、五三〇
一九一八	二、三八〇	一三、六〇〇	一五、九八〇
一九一九	二一四、三四〇	一二七、八二〇	三四二、一六〇
一九二〇	七二五、八四〇	四〇五、八九〇	一、一三一、七三〇
一九二一	七〇六、〇〇〇	一二六、〇〇〇	八三二、〇〇〇

尙製鋼品を重なる種類に分ち其製産高を示せば左の如くにしてアシエ、マルシャン約三割五分を占め次で厚板の一割二分五厘線條の一割一分五厘レールの一割一分三厘プロファイル・スベシヲの一割を主として以下薄板小梁胴金等の順序なりとす。

主要製鋼品目表 (單位噸)

年次	軌條	小梁	胴金	アシエ・マルシャン製品	スベシヲ	線條	厚板	薄板
一九一一年	三、七五〇	一、六六〇	三、五五〇	四、八七〇	一、五三〇	二、一八〇	二、〇三〇	一〇、七五〇
一九一二	三、九一〇	二、三三〇	四、〇三〇	六、〇六〇	一、七六〇	二、四三〇	二、五七〇	一三、一〇〇
一九一三	三、六九〇	一、七五〇	三、四三〇	六、四二〇	一、六五〇	二、四三〇	二、五七〇	一三、一〇〇
一九一四	一、五三〇	九、一〇〇	一、五三〇	七、九六〇	一、三三〇	一〇〇、一〇〇	一六、八三〇	七〇、四〇〇
一九一五	二、八五〇	五、八〇〇	三、〇〇〇	五、八〇〇	七、一〇〇	一、二〇〇	五、六六〇	一五、六〇〇
一九一六	九、七〇〇	三、五〇〇	二、六〇〇	四、三〇〇	二、三六〇	五、一〇〇	二、六二〇	二六、四〇〇
一九一七	一、〇〇〇	—	—	四、〇〇〇	四、五〇〇	九〇〇	三、七〇〇	一三、七〇〇
一九一八	—	—	—	三、八〇〇	四〇〇	九〇〇	一、〇〇〇	一〇、八〇〇
一九一九	四、〇〇〇	三、六〇〇	五、五〇〇	六、六〇〇	八、七〇〇	三、七〇〇	三、七〇〇	三六、九〇〇
一九二〇	三、三〇〇	三、六〇〇	三、六〇〇	三、六〇〇	一、一七〇	一、三〇〇	一、三〇〇	一〇、四〇〇

◎鐵類在荷減少

東京、横濱、大阪、神戸の八月末に於ける鐵類の在荷は總計十五萬三千六百六十一噸にて前月末の十七萬三千六百六十一噸に比して二萬噸の減少を示した、七月末迄鐵類の在荷は多少宛毎月増加の趨勢にあつたが今回始めて減少に轉じた、其原因は新規約定も尠く注文品も入荷済の時期に入つた爲めである、尙之が品種別増減を觀れば減少した主なるものは棒鐵約七千噸、板七千三百噸、鉚力三千八百噸にて、増加したものは釘の一千六百噸が目立つに過ぎない、即ち之を表示すれば左の如し。(單位噸)

棒鐵	三九、八〇二	鐵板	五五、五九六
型物	一八、二〇四	亞鉛引鐵板	四、六六五
鉚力	五、九六六	釘	八、五四二
針金	一五、五二一	レール	三、九一四
其他	一、四五一	合 計	一五三、六六一

○正 誤 (第八年第九號)

頁	段	行	位 置	誤	正
三	下	第一圖中	七〇、八〇〇ノ間	1.3%	1.13%
同	同	同	七〇 度	70	70
四	上	第二圖中	・四、六間約七二	無	A1
八	同	第七圖中	曲線線	55-60	55-65
七	下	一七	玉井秋治ノ下	辻敬三	取消

◎輸出入貨物品別表(大藏省發行の大正十一年七月外國貿易)

(月表中鐵及鋼に關するもの左の如し)

第一 輸出貨物品別表

内國産品名	大正十一年七月		本年一月以降累計	
	數量	價格(圓)	數量	價格(圓)
石				
塊炭(噸)	二六八二五	一五八、三〇一	一、〇〇一、一七九	一四〇、〇一四
及				
條、竿及板(擔)	五八〇	五、三三八	九、〇三八	七四、四八九
鐵				
線	一一、〇〇九	一六五、五二五	九七、〇四八	一、二七五、七九
線	一一、八八	三、六五九	二五、三九〇	六〇九、二八八
筒及管	一一、八二	四、九三三	五、三二一	一、九六七、三五
屑及故器	二、〇〇四	三、六六九	六七、三五	七二七、八五
瑛瑛鐵器	一一、九六三	六四、〇〇四	一一七、三三四	五、六六二、五五
鐵製品				
縫針、千个(骨、打)	五、三三四	二九、五九	九一、五九〇	二、五九七、四〇
傘	一六、八五	三、一七二	一、四、五九	二、六〇、〇七
石油罐及鋁力製品	—	一〇四、〇八	—	六、七三、九四七
人力車及同部分品	—	三、三八四	—	三、六六、七
自轉車及同部分品	—	四、一四七	—	二、五七、六四
船舶(汽船及其他)(隻)	二	二〇、九六五	一四	一、二八四、〇四六
機械同部分品附屬品	—	一、七九、三〇	—	七、八九六、七四

第二 輸入貨物品別表

外國産品名	大正十一年七月		本年一月以降累計	
	數量	價格(圓)	數量	價格(圓)
石				
油(瓦)	三、三三九、六四	一、八三、六四八	一、九三、七二八	一、三三、二六
石				
炭(噸)	七九、三六	一、二五、〇七〇	五、四八八	八、五九、八八一
コ				
ク	四七二	二、一八五	一、八、四八	五、七三、五七

統計

鐵	鑄(擔)	八三、四四一	七、三九四、三	五、〇七、三六	六、一九七、七四
鐵塊(銑)	鐵(擔)	三、三三、三五	一一、七八八、二	二、五九七、五一	八、八三、七八
及銑	フェロマンガニース	六、一九八	五、一六九	一九、二七六	一、八二、七三〇
條竿、テ、ア、ン、グ、ル、形、類、(擔)		六、九〇、〇七	三、八六、一五八	二、六三、四一八	一、六五、一八六
線	材(擔)	九四、九九六	五、八九六、四五	七〇、三二六	四、三二、七〇
板	(金屬を鍍せざる)(擔)	八七、二〇三	九、二二二、二八一	四、七八、三六	五、六〇九、三六
板	(電鍍したる)(擔)	一四、九七五	三、〇六八、三	一、二、九七七	二、九六、〇五五
葉鐵、葉鋼其他板(擔)		六、五、六〇九	九、〇〇、三七〇	七、三、四四〇	一、一、〇〇、八二一
線	(金屬を鍍せざる)(擔)	一一、八〇五	一、一、〇、九二	四、五、一三〇	四、七三、〇九八
線	(電鍍したる)(擔)	九八、四八八	一、〇、八、二五四	六、七三、三二	六、七六、四七〇
リ	ン(擔)	一、三三七	四、六、三九四	九、八九〇	四、九一、七三三
帶	及 箍(擔)	一、五、七九〇	一、六、一、八六	九、一、九一	一、〇、三六、二七三
線	索及撚合線(擔)	六、七一	一、三、七九〇	九、九、九四	二、四八、六三四
筒	及 管(擔)	一、二、七、六九	七、五、〇、四〇	九、〇、三三五	六、三二、〇六三
屑及故	鐵(擔)	七、四、四九五	一、九、五、五六	五、七、六六	一、五、七、五六〇
鐵釘(金屬を鍍せざる)(擔)		一、〇、四、五九	三、三、七、九三	六、六、四、六八	五、一、〇、九八
其他の釘類(斤)		五、〇、六、五七	一、八、〇、一三八	二、九、七、三、二九	一、一、九、六、五四
鐵道建設用材料(軌條其他)(擔)		三、七、五八	二、一、五、〇、八二	一、六、六、二、五三	九、四九、一、六一五
家屋橋梁船舶等建設材料(斤)		七、七、五九	二、〇、八、〇八	七、一、五、九、四七	一、二、一、一、四九
瓦斯ホールダー、液體タ		一、四、一、七六	五、八、四、七	一、二、七、四、五	五、一、〇、四六
シ、ク、及、同、部、分、品		—	—	—	—
壓搾瓦斯填充鐵シリンドラー(斤)		一、四、〇、四八四	四、一、一、八九	五、九、九、九六	一、九、九、九六〇
鐵	鏈(斤)	—	—	—	—
鐵	製 品	—	—	—	—
銃砲及部 分 品		—	—	—	—
鐵道車輛及同部分品		—	—	—	—
自動車及同部分品(輛)		七、六	七、六、八、〇一〇	四、四、六	四、三、七、九二
自轉車及同部分品(輛)		七、一一	六、〇、五、三九	五、九、八三	四、三、八、二二
汽船(船齡十年以下及其他)(隻)		一	二、八、〇、〇〇〇	一、五	三、一、四、九、五七

七七三

汽罐同部分品及附屬品	一八四、三六九	四、六六二、四三三
フューエル、エコノマイザー(斤)	一五〇、〇七	七、四〇、〇六一
鐵道機關車及同炭水車	一五、〇五三	七、九五、二〇五
スチームタービン	—	八〇九、八五四
瓦斯、石油、熱氣機關(斤)	二〇六、一五五	一、七〇、六四七
ウォータータービン及ベ(斤)	—	一、七二、八〇〇
ルトン水車	—	一、九六、二六四
發電機電勵機類(斤)	一、六八、八八七	六、二五、六四七
ク レ ー	七六、一五	五、一二三
氣體壓搾機(斤)	二九三、〇四五	一、四八、二四
縫衣機(斤)	一九五、二三三	一、七五、四三八
金屬工及木工機械(擔)	五七、二八	四、八二、三
紡績機(擔)	一八六、二	二、八三、七二
織布機	—	一、〇六、一六四

第三 輸出重要品國別表

內國產品名	國名	大正十一年		同十年	
		數量	價格(圓)	數量	價格(圓)
石 炭	支 那(噸)	二九四、九四一	三、七六、一八四〇	五〇〇、五二一	六、九二、九七四
	香港	一四、八七五	三、三二、四三〇五	二、八八、五三三	四、九七、一四三
	海峽殖民地	一八五、一五三	二、七四、八三六	二、八八、四七一	五、六二、四九八
	比 律 賓	三、一〇〇	一、八二、八〇〇	一、二六、三三三	二、四三、六四七〇
鐵	支 那(擔)	一九三、七九	二、〇一、三八四	一、四〇、一四	一、三二、二五
	關 東 州	一、四九二	一、一四、五五六	一、二七、一〇	一、五七、二二
鐵 製 品	支 那	—	二、〇〇、五七三	—	一、七九、五九一七
	關 東 州	—	九七九、六七四	—	九、二四、二五六
鐵 製 品	支 那	—	六九七、七七一	—	六、二、九五
機械及同部分品	關 東 州	—	一、四六、一〇三	—	一、三二、四六六

第四 輸入重要品國別表

外國產品名	國名	大正十一年		同十年	
		數量	價格(圓)	數量	價格(圓)
石 炭	支 那(噸)	一、八、九四	二、三九、二九六	二、五九、六五	四、七二、五九
	關 東 州	三、五、二五	四、三〇、七六九	八、八、九一	一、九五、三三八
鐵鑛及其他の鑛	支 那(噸)	—	四、六〇、四三三	—	四、六六、五四三
	海峽殖民地	—	一、八八、八〇一	—	一、〇六、六八〇
鐵 (塊 及 錠)	支 那(擔)	七、四、五七	二、六六、一七七	五〇、二、七九	二、一五、四三三
	關 東 州	八、五、七四三	二、三六、六三六	五七、六、二七四	二、〇七、四八四
	英 國	六、八、三三	二、三六、六六四	三、六、九九	一、八六、〇五三
	印 度	一、六、〇六	九、二四、六三	三、五、八、四六	三、四六、〇六一
	瑞 典	五、九、七〇	四、八、一四五	二、七、八七五	二、二四、一三三
	瑞 典	八、七、〇四	四、六三、六八	一〇、九、四	一、〇四、三三五
鐵 (條 竿 板 線 類)	英 國(擔)	一、六三、六三	三、九六、二五八	九、二、二五	一、九〇、三、七三
	獨 逸	一、八〇、八六二	一、八四、一六二	一、三、四七二	一、七二、三九五
	白 耳 義	七、四、三、九五	四、四、一、五〇	五、五、三八	五、三九、〇四〇
	瑞 典	四、一、七〇	六、四、〇、八五	三、二、六三	五、三〇、六四五
	瑞 典	五、五、〇、六二八	五、三、九、八五	四、二、三、〇九	六、二六、七〇、一六二
鐵 (筒 及 管)	英 國(擔)	一、四、七、九	五、六、六、二〇	三、八、八二	一、一〇、九、三〇二
	國 (擔)	三、八、一、三四三	四、〇三、三四四	四、〇〇、四九八	七、三三、一五二
	國 (擔)	三、五、〇、一一	二、五、六、七、三九	一、三、八、八〇	二、一八、三、五五
鐵 釘	支 那(擔)	—	一、一〇、六、八六	—	三、四二、七九八
鐵道車輛及同部分品	英 國	—	三、二、四、三三	—	三、九八、四、六五
自動車及同部分品	英 國	—	二、八、一、六四、〇〇	—	一、七九、五九一七
	佛 國	—	一、七、三、七、四七八	—	五、八三、四、六七
機械同部分品	瑞 典	—	四、三、二、三四	—	三、六六、一、三三
	瑞 典	—	一、七、三、三、六	—	一、一七、六、三二
	瑞 典	—	三、五、一、九、一二	—	四、三、四、六、六二

◎本邦重要礦物產出狀況

(大正十一年七月中農商務省鑛山局調)

重要礦物總產額

名 稱	大正十一年七月	大正十一年一月以降累計	同 十 年
金 (匁)	一三八、七五二	一、一三、七〇〇	一、一〇三、一〇二
銀 (匁)	二、二七一、二一五	一八、五八六、六二一	二〇、三三三、八五七
銅 (斤)	六、四四一、九一一	四八、〇九五、六四九	五一、七五一、三八一
鐵 (佛蘭)	三、三六六	二一、二九二	二一、三七八
石 炭 (佛蘭)	一、九六〇、七五九	一四、五二二、三八五	一三、七三三、八〇三
石 油 (石)	一四二、一八三	九六〇、八八七	一、一〇八、八六四
硫 黃 (佛蘭)	三、〇五二	一九、一八六	一五、八一四

銅の產出狀況

(△は減少を示す)

鑛山名	所在地	大正十一年七月	本年一月以降累計	前年同期累計 と比較増減
足尾	栃木	一、六四三、七二一	一一、三二八、二四三	二二九、六一六
別子	愛媛	七九五、二四一	八、五六六、〇三七	△六一、二三四
日立	茨城	八四七、八五〇	五、八四六、九九七	九八五、二四四
小坂	秋田	九五六、九八七	五、七七八、八〇九	一、〇五九、五一八
佐賀ノ關	大分	五四八、六四二	三、九〇三、二九〇	一、〇八六、九二〇
尾小屋	石川	二九八、四一二	一、九七八、六〇〇	△五四六、七五七
尾去澤	秋田	三二五、九二七	二、〇五一、七一一	△八、九五六
直島	香川	四六二、六六二	四、〇九五、九七九	一、七四五、八四四
荒川	秋田	一六九、一六〇	一、一八七、五八八	△二四五、〇三三
安部城	青森	一〇二、二七七	九四一、九一二	△一六九、五八五
阿仁	秋田	七一、五八三	六四一、八七〇	△一六六、六二九

統計

石炭の產出狀況

鑛山名	所在地	大正十一年七月	本年一月以降累計	前年同期累計 と比較増減
棋峰	宮崎	五五、三九〇	五七七、二四七	△一五五、七二〇
國富	北海道	八〇、三七一	五五〇、五三六	三四、〇四八
永松	山形	五五、〇四〇	三五七、一八〇	△八〇、一六七

鑛山名	所在地	大正十一年七月	本年一月以降累計	前年同期累計 と比較増減
三井池田	福岡	一七三、九五六	一、〇四〇、三〇一	二二、六三六
三井田川	同	六八、五三五	五五四、九〇九	三七、三二四
大ノ浦	同	八〇、七二〇	五九四、六九五	八七、二九一
夕張	北海道	六七、一三二	五四一、〇九九	四三、二四九
二ノ瀨	福岡	七二、五〇〇	五四九、五二一	九四、九三一
飯塚	同	四七、四六三	三二五、一一三	一〇、二七六
内郷	福岡	四三、〇三一	二八八、二四〇	一七、二九一
杵島	佐賀	三八、九八九	三〇四、九八六	四、五四九
好間	福岡	二七、二〇〇	一九五、三七三	九八、六〇六
三井山野	福岡	三三、三三一	二五五、七九八	三〇一
美田	福岡	四〇、六八九	二九九、四四四	四四、九八七
美唄	北海道	四七、九五〇	二八七七、三〇	三四、八五七
沖ノ山	山口	三二、七四五	三〇五、六七九	五三、二〇二
明治	福岡	三五、四五五	二五六、一五九	三、一八六
新原海軍	同	三三、九二九	二四七、七三五	八、九九八
松島	長崎	三〇、三三五	二二一、四六六	一八、一七九
峰地	福岡	一五、六二六	一六六、〇一六	七五、八〇三
新夕張	北海道	三三、二二八	二二九、八三二	五、九三二
入山	福岡	二〇、一五六	一六一、九九三	五八、一七〇
相知	佐賀	二三、三〇三	一九一、九四二	二四、七二九
新入	福岡	三一、三六八	二一六、二九二	三、七一〇

七七五

大峰	福岡	二八、〇九一	二〇八、五四七	△	二一、七九八
崎戸	長崎	二七、八四三	二一一、九四一		八、九六三
目尾	福岡	一六、七八八	一九五、一一〇	△	九、六五九
芳谷	佐賀	一五、九一六	一三〇、二七九	△	六六、四九〇
東初見	山口	一一、〇七八	一二七、九九六	△	六七、七七七
高島	長崎	二四、八八三	一九六、一九五		三、三五二
豐岡	福岡	三五、二二〇	二四三、〇一〇		四二、七七九
忠隈	同	二八、三四九	二〇四、九〇四		二九、三〇〇
空知	北海道	二四、四四八	一六四、四六七	△	一、六六七
大辻	福岡	二四、八四一	一八〇、二一二		一八、二〇二
新岩	同	二六、五六四	一九五、一七三		三三、五四四
方城	同	一九、三八四	一一四、八六二	△	二八、〇二一
千代田	茨城	一九、四〇〇	一四三、七三五		一、八〇四
岩屋	佐賀	二一、三六七	一五五、三九九		二四、二八四
芳雄	福岡	一八、八九五	一三六、七五五		一二、三一八
木屋瀬	同	二九、五九二	二〇三、二六一		八二、九六一
上山田	同	一八、七一二	一一八、〇七七		三、六一二
金田	同	一四、九四二	一一八、〇二九		七、五三二
下山田	同	九、四六七	六三、七〇三	△	二二、三六五
茨城無煙	茨城	一七、三一一	一一四、四六九		九、八八三
平山	福岡	一六、九四二	一二七、五〇一		三七、二八九
西沖ノ山	山口	一四、一二六	一〇七、九一七		一一、六〇九
幌内	北海道	一七、六四〇	一二一、六八九		二五、四八九
奔別	同	一八、四四四	一一一、二三九		一一、五七九
眞谷地	同	一四、七〇二	一〇八、一五八		一六、八五八
福岡二坑	福岡	一五、六九九	一〇六、四一五		五五、〇九九

姪濱	同	一三、八一	九九、四〇八	九、三〇一
第二沖ノ山	山口	一一、三八五	九四、八七三	一、四八八
綱分	福岡	一一、一九〇	八四、六〇一	八七二
小野田	福岡	一三、二〇一	九〇、二〇四	九、一三二
三井砂川	北海道	二〇、四八〇	一一五、一四三	二九、九〇七
幾春別	同	一〇、六八五	七六、二〇五	三、二〇五
高尾二坑	福岡	一一、二八八	七九、九六九	一四、二一九
漆生	同	一二、五五九	八二、五九五	一三、八一八
高江	同	一〇、一八六	八二、〇五六	一五、三〇七
大峰分坑	同	九、九〇六	六三、八一六	四、二一五
登川	北海道	一二、六〇〇	六五、三二一	八、一二一
豆田	同	七、〇八九	五四、七九三	一〇、一九八
大夕張	北海道	七、五〇〇	六一、一六五	二、五一〇
福島	福島	九、一七〇	五三、三〇八	八、三九〇
宮尾	福岡	七、九二六	六七、四二六	七、六五六
佐賀	佐賀	一三、〇七二	一一八、四二一	六〇、五五二
大日本	茨城	七、一二三	六五、八六三	八、七八一
茂尻	北海道	一三、二五七	七七、二五二	二二、八一〇

石油の産出状況(單位石)

油田別	所在地	大正十一年七月	本年一月以降累計	前年同期累計と比較増
新津	新潟	三七、三三九	二五六、三四六	五六、六七三
西山	同	一七、二六五	一一六、五九四	二五、二〇七
東山	同	九、三九六	六一、三〇五	八、八九四
豐川	秋田	三〇、九四九	二一四、〇五八	一〇、五九三
黒川	同	一八、六一四	一三一、〇九一	三八、三七五
道川	同	八、五三七	四八、三四三	二九、五四一
由利	同	八、〇五四	四七、六九四	三、六八二